

日本産タマムシ科解説(1)

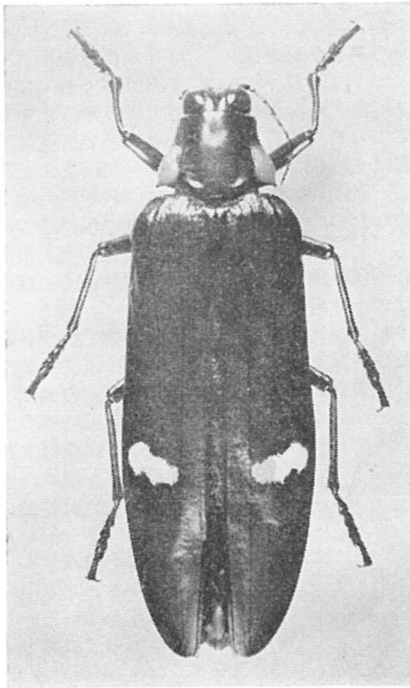
黒沢良彦

私が陸水社を経営しておられた故杉俊郎氏から、「タマムシ科概説」を執筆しないかとお誘いを受けたのは私がまだ津若松にいた昭和26年(1951)の春のことである。当時他に仕事もなかったので、早速お引受けして執筆にかかったが、同年の7月に私は現在の国立科学博物館に故新村太郎氏の後任として勤務することになった。ここで新任の仕事に馴れるまで執筆は一度中断し、結局100余枚の原稿が完成したのは翌27年の末になっていた。一方、陸水社側では原稿の完成を待たずに「虫界速報」誌上其他に度々広告を出してしまったので、かなりの注文を受けたようであったが、そのうちに杉俊郎氏の病(脊椎カリエス)が重くなり、一進一退の状態となって、原稿は完成していながら28年(1953)以後杉氏が亡くなるまでの間、とうとう日の目を見る機会がなく、今まで私の手許に眠り続けることになってしまった。私が原稿をすっぽかしたので出版されなかったのだと思っている人が多いらしいので、一言この原稿に関する限り私の筆不精のせいではないことを弁明しておきたい。

さて、今この原稿を取出して見ると、古色蒼然としていて、とてもすぐには使えそうにもないが、さればとて放置するのももったいないので、この機会に加筆訂正して日に当ててやりたいと思う。

はしがき タマムシ科(Buprestidae)は数多い甲虫の科の中では、比較的多くの種類を含む科の一つで、現在全世界に約6,000種もの種類が知られている。しかし、その中の多くは新旧両大陸の熱帯と

亜熱帯地方に集中し、これらの地方から北上または南下するにつれて種数を急激に減じ、シベリア、樺太などの寒帯には限られた極く僅かの種類を数えるだけである。日本には、その面積にくらべ比較的種類数は多いが、それでも約170種を産するだけで、これは台湾一島に産する種類数の半数にも満たない。



世界最大のタマムシ
Megaloxantha bicolor Fabricius

しかも、タマムシと云えば直ちに法隆寺の玉虫厨子を思い出させるほど、一般に馴染みの深いタマムシ(ヤマトタマムシ)の様な美しい大型種は少なく、小型のナガタマムシ属(*Agrilus*)やチビタマムシ属(*Trachys*)が大部分を占め、余り人目を惹く種類は少ない。しかし、大部分の種類は各種の樹木の幹または枝、場合によっては葉を食害し、森林害虫または果樹害虫として人生との関係も少なくなく、また標本として美しい種類も多いので、タマムシ科のあらましと日本に産する本科の種類分類の概要を記して御参考に供したい。

日本産種の研究史 日本産のタマムシ科の中で最も古くから海外に知られていたのは、やはり最も美しいタマムシ(ヤマトタマムシ)で、スウェーデンのC. P. Thunbergが1789年にインドに産する *Buprestis elegans* Fabricius (現在は *Evides elegans* になっている)

に誤って同定図示したので始まる。しかし、これは誤ってインド産となっているので除外すると、次に1790年に発表されたA. G. Olivierのやはりタマムシの記載(*Buprestis fulgida*とした)が最も古い。その後、19世紀中頃までの間には、C. J. Schönherrによるタマムシの学名訂正(1817)、H. L.

Gory によるウバタマムシの記載 (1840), V. von Motschulsky によるヒラタチビタマムシ類 (*Trachyos subbicornis*) (1860), タマムシ (*Chrysochroa coeruleocephala*) (1861, 対馬) 及びシロオビナカボソタマムシ (*Coraeus quadriundulatus*) (1866) の記載等がそれぞれ他の甲虫の記載と共に発表されたに過ぎない。他に原記載には産地の記述がなく、後になって日本産であることが確かめられたものに, S. C. Snellen van Vollenhoven が 1864 年に記載したアオマダラタマムシ (*Chalchophora amabilis*) がある。やがて, 19世紀も末になり, 有名な G. Lewis の第一回の我国各地での採集品が英国に持帰られると, 1873年にこの標本に基いて E. Saunders が 1 新属を含む 13 属 34 種を記載し, さらに 1892 年には G. Lewis 自身が彼の第 2 回の採集品に基いて 20 種 1 変種を追加発表し, ここに日本産タマムシ相の大略が明かにされるに至った。なお, 18世紀末までには G. Lewis (1894, 1896), A. F. Nonfried (1895), H. von Schönfeldt (1888, 1890), Ch. Kerremans (1898), C. O. Waterhouse (1888) などによって 9 種類が記載され, 今世紀に入ってからは, Ch. Kerremans (1903),

J. Obenberger (1914, 1918, 1919, 1922, 1923, 1924, 1934, 1935, 1936, 1940, 1941, 1943, 1944), 及び A. Théry (1934, 1936, 1937), 邦人では松村松年 (1924), 三輪勇四郎 及び中条道夫 (1935, 1940), 鹿野忠雄 (1929) などの諸氏及び黒沢 (1942, 1946, 1947, 1948, 1950, 1951, 1953, 1954, 1956, 1957, 1959, 1962, 1964, 1967) により, 続々と新種の記載や未記録種の追加があり, また学名の訂正があり, その数は現在 27 属 100 余種になっている (前記の約 170 種としたのは未記載の種類を加えた数である)。

一方幼虫や生態に関するものは, 外人によるものは全くなく, 邦人によるタマムシ, マスダクロホシタマムシ, クリタマムシ, ケヤキナガタムシ, ミカンナガタマムシ, 及びクワナガタマムシ等に関する断片的な報告が数篇あるが, いずれも専門学者のものではなく, 不完全で引用することは出来ない。重要なまとまったものとしては湯浅啓温 (1933), 矢野俊郎 (1952, 1954, 1955), 大串竜一 (1963, 1966, 1967), 芳賀昭治 (1958) 等諸氏の報告があるだけで, 未開拓の方面が多い。(東京, 国立科学博物館)

○尾瀬御池小屋附近にてヒョウタンハネカクシを採集

ヒョウタンハネカクシは札幌及び尾瀬ヶ原を模式産地として 1961 年に中根猛彦博士によって記載された。その後北陸館の原色昆虫大図鑑にも図説されたが, その他の産地は知られていない。私は 1966 年 8 月に御池小屋附近で本種を多数採集したので生息地の環境状態などを報告したい。

御池小屋附近も尾瀬ヶ原と同様各所に湿地が点在しているが, 規模は小さく, 周囲はブナ林帯となっている。これら湿地のひとつにすぐわきがササの叢生している場所があり, その根際及び落葉下より多数の本種を見出した。採集場所は一カ所だけで他の

同様な環境の場所では得られなかった。ササの葉はかなり厚く積っていて, 下の地面は湿っていた。活動はアリモドキを思わせるような歩行動作であるが, あまり活発ではなく, 体色がアメ色で小さく, 翅鞘によってほとんど腹部が覆われているため, 一見コケムシ科を思わせる体型をしている。

本種の生息地は湿原と関係があると思われるので, 湿原の多い奥利根流域及び上州武尊あたりでも, 今後採集される可能性がある。

(東京都世田谷区, 林田修三)

○大菩薩でアラメハナカミキリを採る

筆者は, 大菩薩沼ノ窪付近において, 立枯れ (恐らくモミ) の表面を這っていたアラメハナカミキリを採集しているので報告する。

1 頭, 山梨県大菩薩, 12. vi. 1967, 酒井香
本種は本州では, 北アルプス, 南アルプス, 奥日光等で採集されるが, 比較的稀な種で, 特に大菩薩においては, 今回が初の記録と思われる。

なお当日は他に, テツイロハナ, キモンハナ, アカネトラ, フジコブヤハズ等 40 余種のカミキリムシを採集している。(東京都世田谷区, 酒井香)

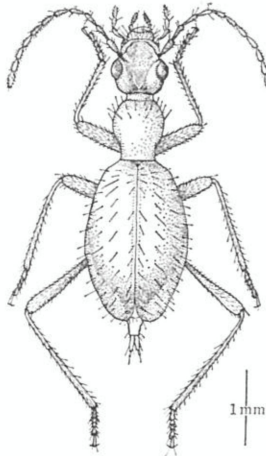
○キムラクロオサムシの緑化型を採集

従来, キムラクロオサムシ (*Apotomopterus alb-rechti kimurai*) は金銅色の型きり知られていなかったが, このほど緑化型 (黄緑色型) を採集したので, ここに報告する。

1♂1♀, 山梨県十島, 2. iv. 1967, 奥村尚; 1♀, 同上, 30. x. 1967, 奥村尚,

なおこの産地は富士川の東側に位置している。

(横浜市中区, 奥村尚)



○三浦半島のムナビロアトシオゴミムシの記録
ムナビロアトシオゴミムシ (*Chlaenius tetragonoderus*) は南方系の種類で、ほぼ海岸沿いに分布している。従来の本州での記録は、日本海側では京都府冠島、新潟県黒川、太平洋側では奈良春日山などが記録されている。関東では房総半島、伊豆御蔵島などで得られているようであるが、今回三浦半島で私が採集した記録を報告する。

1♂, 三浦半島武山, 24. xii. 1965, 奥村尚採集;
3♂ 3♀♀, 三浦半島二子山, 19. xi. 1967, 稲垣敏和, 稲垣信敏, 奥村勉, 奥村尚採集 (横浜市中区, 奥村尚)

○*Quedius (Microsaurus) umbratus* S.
Uéno et Y. Watanabe の採集記録

鍾乳洞, 廃坑, 土中など地表下に生活する *Quedius* 属については上野, 渡辺 (Bull. Nat. Sci. Mus. Tokyo 9(3), 1966) により6種が新種として記載された。そのうち奥多摩倉沢鍾乳洞を模式産地とした *L. umbratus* は1♂に基づいて記載されたものであるが、筆者は最近下記の如く2頭目の個体を採集する機会に恵まれたので報告する。

1♂, 奥多摩倉沢鍾乳洞, 5. xi. 1967, 柴田泰利
(東京都港区, 柴田泰利)

○岩手県に産する甲虫4種の報告

1. コボトケヒゲナガコバネカミキリ

1♀ 31. v. 1966, 岩手県盛岡市根田茂, 中村七三, 採集地は、盛岡市内ではあるが、北上山地西部の山麓地であって、乱獲採集によって得られたものである。その後、同地帯を再三に亘り採集調査を試みているが、未だ発見し得ないでいる。

2. ヨツボシゲンセイ

5頭, 10. viii. 1965, 岩手県二戸郡安代町苗代沢, 工藤時雄

東北に於ける本種の記録はないと思われるので報告する。採集された5個体のうち、上翅の4黒紋の変形し著しく大きいもの、及び黒紋が全く認められないもの各一頭が含まれ、それらが同時に採集されている。

3. アカヘリミドリタマムシ

1♀, 14. v. 1965, 岩手県下閉伊郡新里村和井内, 佐々木勇幸

採集地は北上山地中央部の低地。黒沢博士によれば、本記録は10頭目に当る由。

以上3種の同定を頂いた黒沢良彦博士に深く感謝申し上げます。

4. ホソヒメクロオサムシ

2♂, 6. v. 1965; 22. viii. 1965, 岩手県和賀郡湯田町鷺合森, 佐藤 巧

本種の分布は、原色昆虫大図鑑Ⅱによれば本州(日光附近・中部地帯)となっているが岩手県にも産することが確認されたので報告する。本種の同定を頂いた石川良輔氏に謝意を表す。

(岩手県盛岡市, 中村七三)

○ヤスマツケシタマムシ新潟県に産す

特異な形態をもった微小なヤスマツケシタマムシは、本邦での産地は近畿以西の本州および九州とされていた。

ところが1967年5月10日、その1頭が新潟県新発田市大字蔵光地内水谷沢山林(標高60m)中でスーピングにより採集された。この個体は黒沢博士によれば“九州産等と比し青藍色光沢が強い”とのことであるが、詳細は目下同博士の手許にあって研究中である。

近畿以北より初めて採集されたものであり、かつ、その産地が雪深い新潟県北部である点、注目に価すると思われるので報告する。

末筆ながら、御教示をいただいた黒沢良彦博士に深謝する。(新潟県新発田市, 小池寛)

○サメハダハマキチョッキリの加害植物

福島県会津若松市の鶴ヶ城趾の裏を流れる湯川に面した墓地の一角に大きなポプラの木がある。5月の初旬に行くところのポプラの根元から生ずるひこ生の先端にチョッキリゾウムシ類特有の揺籃が見られ、運がよければ、作業中のものや交尾中のサメハダハマキチョッキリを見出すことが出来る。しかしポプラは輸入植物であるから、本来の加害植物はポプラと同属の在来種であろうと、注意していたら、やはり会津若松市門田町御山の山中でヤマナラシの新梢を捲いているのを見つけ、更に南会津郡下郷町大内峠でドロノキの葉を捲いているのを見つけ、在来の *Populus* 属にはどれにも加害することを確めた。また北会津村宮下の鶴沼川の河原でもカワヤナギと思えるヤナギの1種の葉上から採集した。あたりにはドロノキ類は全く見当たらないので、恐らくヤナギ類も捲くのであろう。

なおこのゾウムシは会津地方の平地では青色がかった色をしたものが多く、山地では美しい金緑色のものが多い。(東京都世田谷区, 黒沢良彦)

○コガネムシ2種の採集記録

コガネムシ科の中で、比較的珍らしい2種の記録を報告する。

1. アカマダラコガネ 1頭, 神奈川県大船天園, 25. iv. 1965.

マツの倒木より得た。

2. アカマダラセンチコガネ 1頭. 群馬県片品村大沢, 28. v. 1966. 桜井俊一氏標本所有。花上に飛来した。

アカマダラコガネは、平地性の種で、花、果実、樹液に飛来することが多く、一方アカマダラセンチコガネは、獣糞に集るといわれている。この記録は逆のようであるが、誤りではない。

(神奈川県藤沢市, 井本憲邦)

○中国大陸でトホシマルオオハムシを採る

日本にも分布するキベリハムシを含むマルオオハムシ属は、ハムシ科ヒゲナガハムシ亜科に属し、群を抜く大形種からなり、色斑も美しくまことに見事な甲虫である。私はいつかは生きた本属の種を採つ

てみたいと思っていたが、二度の大陸行きで、本属の3種を採集することができた。この中で顕著なトホシマルオオハムシ *Oides decempunctata* Billberg の採集のようを紹介したい。

1940年9月13日、北支那山西省の潞安という街で、栽培ブドウ（甲州ブドウによく似た品種）についていたのを40余頭採集した。行動が鈍重で採集し易かった。

1944年二度目の渡支で湖南省に向ったが、翌年の6月下旬、永豊というところでも多数採集した。これは野生種ブドウ属の1種についていたものだが、食草となっているこのブドウは、濃緑で光沢のある厚い葉をもち、川べりの土手に這っていた。この年の8月中旬新しようという小都市の街端れでも、同属の別種と混生していたものをかなり採集した。ここでは、ノブドウ（日本と同一種）と、永豊とは別種の野生種ブドウの1種を食害していた。更に9月に入り、岳陽と湖北省武昌県坊嶺でも採集したが、これらの地での食草は同一種で、前記野生ブドウの種とは異なるブドウとみられた。

本種の体色は、死後例外なく黄土色となり、日本昆虫図鑑（旧版 p.596）の説明も、このように記されている。しかし生時は、淡い黄褐色で陶器様の光沢があり、桃色を帯びて美しい。各上翅には、2・2・1の配列で、名の如く10個の黒紋を装っている。

このように、中国大陸の各地で多数の本種を採集し、また観察したが、これらの範囲では、黒紋の1個でも消失したり融合したりした個体を見なかった。有紋のハムシとしては、珍らしく斑紋が安定している種類のようなのである。（山形県酒田市、白畑孝太郎）

○カエデノヘリグロハナカミキリの擬死または仮死行動

カエデノヘリグロハナカミキリは、関東地方での個体数は余り多いものではないが、1966年5月22日、東京都西多摩郡日原で、飛翔中の本種を採集した際、その個体は触角を前方へそらえてのぼし、肢を後下方にそらえて、硬直した状態を示し、手で触れるとすぐこの状態は解けて動き出した。しかし別の個体

はネット内に止まって、こうした行動を示さなかった。ただ後者の場合にはネットで軽くすくったのに対し、前者の場合には相当強く振っているの、ショックによる仮死状態であるかも知れないが、他のハナカミキリでこのような硬直状態を見たことがないので、擬死行動として報告する。

（東京都中央区、中村俊彦）

○夜叉神峠のハナカミキリ3種

昨年(1967)8月3日、4日の両日夜叉神峠——広河原——西山温泉の間で採集を試み、分布上興味あるハナカミキリを得たので報告する。

イガブチヒゲハナカミキリ、1♀、4. viii. 1967、夜叉神峠トンネル附近。飛翔中。

ヒメヨツズジハナカミキリ (*Leptura kusamai*)、2♂2♀、4. viii. 1967、夜叉神峠トンネル西口より約2kmの地点でノリウツギの花上より。

両種共南アでは大井川上流(二軒小屋、樺島附近)で記録されているが、富士川上流の早川流域にも分布している点から、かなり広範囲に認められるものと考えられる。

キベリカタビロハナカミキリ黄褐色型 (f. *kusamai*)、1♀、4. viii. 1967、夜叉神峠の土場に飛来。大菩薩峠にも記録があるので、当然夜叉神峠にも分布することが予想されたが、富士川流域の記録に未だ接しないので報告する。

なお、当地方は芦安から広河原までの間が非舗装ではあるが有料道路となり、更に西山温泉を経て身延まで自動車道路が開通（その間に多数の土場がある）、京浜地方からの交通の便がよくなったため、今後大いに調査されてよい所と思われる。

（埼玉県浦和市 衣笠恵士）

甲虫談話会：

会費（1カ年）500円、第2号は5月末発行予定、投稿〆切は4月15日。

発行人 黒沢良彦

発行所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園

国立科学博物館動物研究部内

電(822)0111、振替東京 60,664

台湾産カミキリムシ価格表

東京都練馬区石神井局私書箱3号 大蔵生物研究所

台湾産カミキリムシ		価格表		東京都練馬区石神井局私書箱3号		大蔵生物研究所		
	♂	♀		♂	♀	♂	♀	
トグアチオオウスバカミキリ	200		コウトウアオカミキリ	300	200	オオシロスジカミキリ	600	400
キンケヨツズジハナカミカキリ	50		アカヘリホソアオカミキリ	50		シロスジカミキリ	200	200
モモトコバネカミキリ(二級品)	20		カギモンドリホソトラカミキリ	40		タワカミキリ	50	
アジアトビロカミキリ	100		シーモントラカミキリ	50		テンモンヒゲナガカミキリ	100	70
イエカミキリ	80	70	コムドリトラカミキリ	40		コウトウキボシカミキリ	100	70
ムンヤミヤマカミキリ	500	300	メンガタトラカミキリ	100		コウトウタテスジヒゲナガカミキリ	80	50
タイワンビロウドカミキリ(二級品)	150	100	カタアトラカミキリ	100		コウトウタテスジカミキリ	100	100
ムナグロキンバネカミキリ	100		タイワンクビアトラカミキリ	100		サビアヤカミキリ	300	200
イソシキミヤマカミキリ	70		ムモンチビソトラカミキリ	50		ジヤノメカミキリ	100	
キボシヒメミヤマカミキリ	70		カバイロホソトラカミキリ	50		タカサゴシロカミキリ(二級品)	50	50
タイワンクスベニカミキリ	50		ケナガカミキリ	50		フチトリセジロカミキリ(二級品)	50	50
ホソクスベニカミキリ	50		ベニツヤカミキリ	100	70	ニセカタゾウカミキリ	100	
ムネモンウスバベニカミキリ	50		タイワンコブスジカミキリ	200		ルリキラボシカミキリ	100	
タカサゴベニカミキリ	70		ハデンラホンカミキリ	900	800	クワノキモンカミキリ	200	
キムネウスグロバカミキリ	40		ゴマダラカミキリ	50	50	スインホーカミキリ	100	
キムネムラサキカミキリ	200	200	モンキカミキリ	800	700	タイワンルリカミキリ(二級品)	20	
タイワンアシアオカミキリ	200		コウトウフトカミキリ	200	200	他にも在庫多数ありお問合せ下さい。		